関西大学国文学会彙報

一、令和三年度関西大学国語国文学専修年間行事（一部予定）

令和3年7月24日㈯　第一回国文学会研究発表会
（オンライン開催、後掲）
10月26日㈫　三年次生就職・卒論セミナー
（千里山キャンパスにてオンライン開催）
11月17日㈬　二年次生国文学コースの懇談会
11月25日㈭　二年次生国語学コースの懇談会
11月25日㈭　院生合同学術研究大会
12月25日㈯　第二回国文学会研究発表会
（オンライン開催、後掲）
令和4年3月23日㈬　新二年次生対象専修別履修ガイダンス
（国文学会主催ポスターセッション併催）

二、関西大学国文学会研究発表会

◇第一回国文学会研究発表会

日　時　令和三年七月二十四日（土）午後一時五〇分より
会　場　Zoomによるオンライン開催
総　会
研究発表
「村上春樹『スプートニクの恋人』論
―スプートニク／孤独／喪失―」
本学大学院博士課程前期課程　何　仁武
「「クレーム」と「クレーマー」の相互作用」
本学大学院博士課程前期課程　呉　文傑
「『日本書紀』古写本にみる助数詞「枚」の訓みと対象語」
本学大学院博士課程後期課程　張　翔
講　演
「『源氏物語』古注釈書研究の課題と展望」
本学准教授　松本　大

◇第二回国文学会研究発表会

日　時　令和三年十二月二十五日（土）午後一時五〇分より

会　場　Zoomによるオンライン開催

研究発表

「謹字の造字法、形態的特徴の整理と考察」

本学大学院博士課程後期課程　岩下　真央

講　演

「文学史としての伝説歌」　本学教授　村田右富実

三、関西大学国文学会研究発表会 発表要旨

なお、成稿し、本号に掲載したものについては省略した。

◇第一回国文学会研究発表会（七月二十四日）

研究発表

「村上春樹『スプートニクの恋人』論

―スプートニク／孤独／喪失―」

何　仁武

『スプートニクの恋人』は、村上春樹の第九作目の書き下ろしの長編小説で、一九九九年四月に講談社より出版された。本作はストーリー自体が難解であるためか同時代評では批評がされた。

本作に関して、先行論で最も注目されたのは主人公のすみれの帰還をめぐる小説の結末を論究したものとすみれが行った〈あちら側〉の定義を論じたものである。

しかし、本作の主人公であるすみれについては、作品中で重要な存在であるにもかかわらず、ほとんど論究されてこなかった。そこで、本発表は本作の主人公のすみれに着目し、彼女とタイトルの核心であるスプートニクとの関係性を考察してきた。

本作は主人公のすみれが生まれて初めて恋に落ちたことを中心に展開しており、スプートニクが本文中で所々に出てきてすみれの恋に絡み合っている。それによって、本作におけるスプートニクは人工衛星という一般的な意味から変化し、一つのメタファーになった。そのメタファーはストーリーの展開即ちすみれの恋の進捗状況と共に変化する。

例えば、すみれがミュウを好きになった際に、スプートニクが①すみれから見たミュウとなったことから始まり、やがて迷い込んでいる②すみれ自身に喩えられ、それからミュウとヨー

ロッパに同行する③すみれに当てはまり、最後は④マイノリティである二人の象徴となったことで終わる。つまり、本作でのスプートニクは四重の意味を有し、その意味はすべてすみれに関わっているのだ。

特に論者が注目したいのは、スプートニクの意味④のところだ。つまり、スプートニクがすみれとミュウの象徴となったところである。地球から宇宙に放り出された人工衛星がマイノリティの人間の象徴となったことには、明らかに「地球」あるいは「マジョリティ」という「こちら側」と、「宇宙空間」あるいは「マイノリティ」という「あちら側」が存在している。

要するに、本発表ではすみれの心境と繋がっているスプートニクは一つのメタファーとなったことがわかった。そのメタファーは本作において長年にわたり議論されてきた「こちら側」と「あちら側」という問題に繋がっていると考える。

「「クレーム」と「クレーマー」の相互作用」

呉　文傑

現代日本では、特に二〇〇七年以来、「クレーマー」という新たな外来語にマイナスの感情的意味が付加され、社会問題の一つとして非常に注目されている。

よって、本研究では、「クレーマー」の基本語化と意味拡張を明らかにし、原形「クレーム」が派生形「クレーマー」の意味に影響を与えたという仮説を立て、調査を行った。しかし、意味用法の拡張は確かに予想通りであったが、マイナスの感情的意味の付加は予想に反する結果を得た。

本研究は先行研究で用いられた「通時的新聞コーパス」のデータを参照しつつ、主に現代書き言葉均衡コーパスや朝日新聞をはじめとする各新聞記事データベースを用いて語彙の意味調査を行い、「クレーム」と「クレーマー」の意味用法の変化とマイナスの感情的意味の付加のプロセスを検討した。

第1－2節は、研究の目的と背景を把握し、「クレーム」に関する先行研究に基づいて、「クレーム」と「クレーマー」におけるマイナスの感情的意味、お互いの相互作用などを明らかにした。

第3－4節は各版市販の辞書を用いて、「クレーム」と「クレーマー」の辞書的意味の変化を通時的に考察した。また、先行研究に基づいて「クレーム」の「貿易」から「非貿易」への意味拡張を明らかにし、「クレーマー」の意味は「クレーム」からの影響で最初から「非貿易」的意味で用いられていることを証明した。

第5‐6節は同様の方法で「クレーム」と「クレーマー」におけるマイナスの感情的意味の付加のプロセスを解明した。それを踏まえて、マイナスの感情的意味の付加は「クレーマー」から「クレーム」という結論を得た。

第7節は先行研究で残された「クレーム」の発信者に関する問題点を「クレーマー」からの視点を加えて考察し、「クレーム」の発信者が組織・集団から個人へ変化したのは「クレーマー」からの影響だと述べた。

第8節は主に得た結論をまとめ、第9節は今後の課題について述べた。今後は、マクロな視点から「クレーム」と「クレーマー」のような和製的用法を持つ外来語の原形と派生形の関係やお互いの意味への影響を研究したいと考えている。

「『日本書紀』古写本にみる助数詞「枚」の訓みと対象語」　張　翔

（本号掲載）

講　演

「『源氏物語』古注釈書研究の課題と展望」　松本　大

本講演では、これまでに登壇者が行ってきた、注釈書・享受資料に対する研究成果の一端を紹介するとともに、平安文学作品を研究する上での今後の課題や方策を、登壇者なりの視点から述べた。

登壇者の専門とする平安文学研究に限ったことではないが、近年の諸学会・研究会の動向を振り返ってみると、注釈書や享受資料に対する関心は、一定の高まりを見せていると判断される。享受に関する研究は、これまでにも、多種多様かつ膨大な蓄積がなされており、そうした先学の並々ならぬ尽力によって、享受の面白さ・奥深さが眼前に提示されるようになったと思われる。

しかし、享受研究を目指そうとする者の裾野は広がっていない。本文や注釈書の研究は、一部の特殊技能を持った人々の、特殊な世界のこと、といったように捉えられがちであるのも、また事実である。これは、享受研究の成果が、享受研究の枠組みの中でしか活かされていない、ということが一因であると考えている。自戒を込めて述べるならば、享受研究は、作品研究の一部であると同時に、最も作品の根幹に迫れる分野であることを忘れてはならない。享受研究という殻に閉じこもるために研究するのではなく、作品の魅力を外に出すために研究すべき

であろう。

享受研究の視点を広く取れば、現在の我々の文学作品研究もそこに含まれるものであり、様々な面から作品の性格を探ろうとする行為に他ならない。ある作品が（もっと広く言えば、古典文学作品そのものが）、どうして現代まで読み継がれてきたのか、という文学作品としての本質的な問いに対して、その実態を俯瞰的に捉えることが可能な享受研究の立場からこそ、有効な提言が出来るのではないか。

以上のような問題意識から、古注釈書研究の魅力と可能性について、浅薄な卑見を述べさせていただいた。少しでも享受研究に興味を持ち、新たな視点や可能性を模索するきっかけとなれば、幸甚というものである。

◇第二回国文学会研究発表会（十二月二十五日）

研究発表

「讒字の造字法、形態的特徴の整理と考察」　岩下　真央

（本号掲載）

講　演

「文学史としての伝説歌」　村田右富実

『日本書紀』に見える「時人歌」には、当代の事件や伝説（以下、出来事と記す）に対する感想や批評が歌われている。これは、一人称の歌の話者による他者への興味の表現といってよい。『万葉集』にも麻続王配流に際しての「時人歌」と思われる歌（1・二三）と、それに和する麻続王自身の歌（1・二四）が存在する。麻続王の実作ではありえないが、出来事の主人公が伝説の殻を打ち破り現実世界の歌に和している点に注目したい。

このように、出来事をどのように歌という方法を用いて表現するかという観点から見ると、柿本人麻呂の手になる「吉備津采女挽歌」の長歌（2・二一七）は、挽歌でありながら吉備津采女の死を悲しまない話者が存在しており、この話者のありようは平城遷都後の笠金村の「志貴親王挽歌」の長歌（2・二三〇）にも見られる。これは出来事と話者との距離が遠くなり、作品世界内の話者の世界とは別にもう一つの作品世界が存在していると言い方も可能である。

一方、万葉後期の作品である高橋虫麻呂の伝説歌群には、明らかに話者の世界と伝説世界とが峻別されて歌われている。たとえば「浦島子の歌」の長歌（9・一七四〇）にあっては、歌

の冒頭と末尾に配された話者の作品世界に対して入れ子のかたちで浦島伝説が歌われる。「真間娘子の歌」の長歌（9・一八〇七）、「菟原処女の歌」の長歌（9・一八〇九）もほぼ同断である。これらは韻文としてある歌の内部に散文が存在しているともいえる。

そして、「末珠名娘子の歌」の長歌（9・一七三八）では、話者の世界がほとんど表現されず、助動詞の「けり」で伝説世界が縁取られる。『万葉集』の「けり」のほとんどは気づきの「けり」だが、ここに用いられる「けり」は、平安時代の物語に頻出する「昔男ありけり」の「けり」に極めて近い。「末珠名娘子の歌」の長歌は韻文の方法に則った散文といってよいだろう。ここに、平安時代の散文への萌芽を見出してみたい。

四、令和二年度 卒業論文・修士論文・博士論文題目

◇令和二年度 国語国文学専修 卒業論文

〈国文学〉

近藤　万貴　放浪者の生き方
—小栗風葉「世間師」論—

寺本　南椎　永井荷風の源流
—『すみだ川』を中心として—

西岡　颯生　今昔物語集巻二九と芥川龍之介

安部ひかり　安部公房『デンドロカカリヤ』論
—引用の役割を中心に—

余部　良樹　大岡昇平「野火論」
—田村の社会化について—

有光　祐介　『紫式部日記』における女房描写
—紫式部の女房観—

飯田　早紀　山崎俊夫「童貞」「夜の鳥」論
—「弱さ」への憧れ—

石尾　朱里　野干平の創出
—人形浄瑠璃「芦屋道満大内鑑」—

井原　澄玲　小山清「わが師への書」論
—存在しないはずの師を追って—

上野　紗季　蛇身怪談の成立
—百物語系怪談集・伽婢子系怪談集からみる蛇身怪談のイメージ形成—

上野友起子　田山花袋「少女病」に罹病するまで
—『少女病』以前の作品とセクソロジーの観点から—

宇都　優菜　中島敦「悟浄出世」論
—風刺作品としての一面—

浦賀　絢菜　よしもとばなな「花のベッドでひるねして」論
—「死」のあり方を中心に—

江城　風花　谷崎潤一郎『夢の浮橋』論
—「繰り返し」の表現から見る五位庵と糺—

大野　智成　夢野久作「何んでもない」論
—「自殺」と「嘘」について—

大橋　夢乃　烏山石燕「画図百鬼夜行シリーズ」を絵解く

岡崎　真優　『平家物語』「剣巻」に関する考察

小川　玲奈　近松門左衛門が描く男主人公

仮屋　美穂　『古今和歌集』の配列意識
—詞書との関わりから—

川上恵美菜　谷崎潤一郎『春琴抄』論
—佐助と春琴の関係性と芸術的側面を中心に—

菊川　美優　坂口安吾「夜長姫と耳男」論
—像の評価から考える—

岸本　夏帆　吉行淳之介『焔の中』論
—少数派を貫いた「僕」—

北川　詩織　柏木の死と光源氏

木谷　幸大　『古今和歌集』夏の部のほととぎす詠

北村龍之介　桃太郎を「昔話」たらしめる『桃太郎発端話説』

木原　愛望　『元良王集』についての考察
—元良親王の人物像を中心として—

國富　巧斗　江戸時代における幽霊と妖怪との境界線

小池　真由　光源氏の栄華
—「宿世」という観点から—

駒井　利早　『今昔物語集』「巻第二十九・十八」「巻第三十一・三十一」にみる「女性」と「蛇」
—芥川龍之介が『羅生門』の素材とした古典—

小松　栞　狸の登場する物語と狸の神様

坂井　愛香　俊頼歌の「新しさ」
—『堀河百首』からの考察—

作花寿美礼　朝井リョウ『何者』論
—『何者』から見る朝井リョウ作品のテーマ—

佐藤　大翔　『仮名手本忠臣蔵』にみる史実と虚構について

佐渡　亜美　谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のをんな」論
—猫の智慧に翻弄される人間たち—

住友慎太郎　文学作品から見る変化としての狸

世木田夏芽　吾峠呼世晴『鬼滅の刃』に登場する甘露寺蜜璃はなぜかわいいと支持されるのか。

武田　澪奈　光源氏の栄転
—桐壺院・朱雀帝がもたらす影響—

武田　百加　宮部みゆき『ブレイブ・ストーリー』論
—当時の若者たちを中心に—

田中加奈子　『朧月猫の草紙』の研究
—猫の擬人化が猫人気に与えた影響—

田中　沙也　北条伝来の太刀　鶴丸国永
—平氏の象徴として—

椿原　栄梨　和泉式部百首における主題
—恋部の表現を中心に—

豊田　大海　夕顔巻の物の怪
—六条御息所を中心に—

渡來　健三　谷崎潤一郎『猫と庄造と二人のをんな』論
—異端な作品世界—

内藤　玲　源氏の因果とその構造
—密通の応報をめぐって—

濱元優美香　『万葉集』における色名の特色
—「しろ」と「くろ」、「あを」と「あか」のもつ対立構造—

原口　愛子　梶井基次郎「器楽的幻覚」論
—演奏会の構成と「幻覚」の関連—

原口真由子　松本清張『ゼロの焦点』論
—雲と三人の女性がもたらす効果—

平田　陸人　『源氏物語』六条御息所の手紙
—光源氏との関係を巡って—

平林　海斗　泉鏡花　狂気性の現れ
—『義血侠血』を中心に—

藤井　陽菜　江戸川乱歩「猟奇の果」論
—変身願望を読み解く—

藤原　実咲　柏木の死がもたらしたもの
—左大臣家の立場から—

藤原　稜平　『今とりかへばや』作者の『源氏物語』享受に関する一考察

前野　栞里　『源氏物語』の女君の『竹取物語』受容
—女君の主題をめぐって—

松本　瑞稀　吉原遊郭における異空間的形態について

水口　愛　江戸川乱歩『パノラマ島奇譚』論
—廣介の欲望と生み出された効果—

三谷　望佳　『今昔物語集』に描かれた異界について

南田　美玖　佐竹本『三十六歌仙絵巻』のなかの女性の描かれ方
—デジタル処理における考察—

村松　恵実　『好色赤烏帽子』考
—西鶴の浮世草子との比較を中心に—

安田ひめの　和歌から見る『紫式部日記』

山口　絢加　『方言修行金草鞋』の狂歌における傾向について

山田　和広　芥川龍之介『河童』論
—逆転により生じた対照関係を中心に—

山田　華凜　洒落本にえがかれる吉原遊女の姿

山林　武矢　二視点から見る光源氏の言葉
―「過ぐる齢～」を中心に―

山本　有紀　『今昔物語集』本朝仏法部における夢の在り方

渡邊　琴音　『今昔物語集』の修行者から学ぶ健康のあり方とは

渡辺　優花　「源頼光」像の変遷について
―『大江山絵詞』と『御伽草子』所収「酒呑童子」、『土蜘蛛草子』と『前太平記』所収「頼光朝臣瘧病事付土蜘蛛退治事」の比較―

辻東　大雅　三島由紀夫『獣の戯れ』論
―終章の変更に関する考察―

梅澤　香奈　三浦しをん「風が強く吹いている」論
―「強さ」「風」にみる生きることに寄り添うもの―

〈国語学〉

寺田　有希　失笑の語意の変遷をめぐって

秋山奈々絵　格助詞「に」「で」「にて」の歴史的変遷

足立　美緒　漫画や小説からみる執事の言葉遣い

浦　弘次朗　プロレスリングにおけるリングネームと異名の役割

大島かんな　結婚披露宴におけるスピーチの談話分析的研究

大隅　樹　若年層における「させていただく」文の意味拡張とその心理的背景

奥村　綾里　「たえる」の用法について

國生　真希　女性誌の表紙における書体の役割と運用

近藤　未菜　日本語教育におけるオンライン授業の実態
―日本語教師のアンケートに基づく分析―

合田　摩周　仮面ライダーシリーズにおける悪役らしさの変遷

酒井　美奈　抽象名詞＋助詞ヲ＋動詞「払う」のコロケーション変遷について

櫻井　奏　「右」と「左」の間柄
―シチュエーションで変化する意味―

佐藤　好美　〈かわいい〉の表記方法とその特性

島田　風夏　若年層のことばに対する意識
―「誤用」されやすい語彙からの考察―

菅野　航　形容詞「えぐい」の意味拡張

高木　怜　野球・サッカーのチーム名の語構成の比較

高原　愛　複合動詞「～あげる」「～あがる」の文法化について

滝本さくら　きょうだい間の呼称の在り方

武市　梨花　歌詞から見たVOCALOIDとJ-POPの表現特徴

田中　理菜　流行語の定着についての研究

土橋　知起　オゴルの意味拡張と表記

手塚　初響　使用語彙にみる中島みゆきの楽曲ジャンルの変遷

中嶋　里音　播州弁のイメージと一人称代名詞
西川　知輝　副詞「さらに」の用法の歴史
野口　莉香　役割語としての遊女語
—春色梅児誉美にみる—
長谷　敦人　吉本新喜劇におけるギャグの認知に影響する要因
原田　瑞姫　夢枕獏『陰陽師』の小説世界
持田　夏海　出雲方言における行為要求表現の世代差
—「動詞+ダワ」を中心に—
梁瀬　萌恵　近畿地方で使用される動詞否定表現の印象について
趙　欣　中国語話者による日本語の誤用分析
前原ひかる　「ママ」の変遷

◇令和二年九月期　修士（文学）取得論文

〈国文学〉
陳　恩　浅井了意の仮名草子における仏教的な意図
—『伽婢子』を中心に—

〈国語学〉
李　弦娥　日本語受身文の韓国語との対応からみる両言語の表現の特徴
—小説の対訳データを中心に—

◇令和三年三月期　修士（文学）取得論文

〈国文学〉
楊　紫淇　楊千鶴「花咲く季節」論
—「新女性」を中心に—
蔵本　成美　倉橋由美子『聖少女』論
—倉橋が描く女性と第三の性—
橋本　大輝　三島由紀夫『にっぽん製』論
—戦後大衆社会の「にっぽん」らしさ—
山本　茄生　村上春樹の小説における〈雨〉の表象について

〈国語学〉
池田　尋斗　「好きだ」構文における対象語の標示形式と情報構造について
末吉　勇貴　トキ節を用いた複文におけるテンス表現の歴史的変遷
戴　可晨　現中国語における日本語借用語について
—「元気」という言葉を中心に—

金　承恵　歴代オリンピック競技における新聞見出しの日韓比較
―テキストマイニング技法を用いて―

◇令和二年九月期　博士（文学）取得論文

〈国文学〉

ベルチャ　アドリアン　宮沢賢治童話研究
―シャーマニズムとエコクリティシズムの視座―

◇令和三年三月期　博士（文学）取得論文

〈国語学〉

山本　空　対称詞の談話機能に関する対照方言学的研究